正史
実伝

いそは久庫

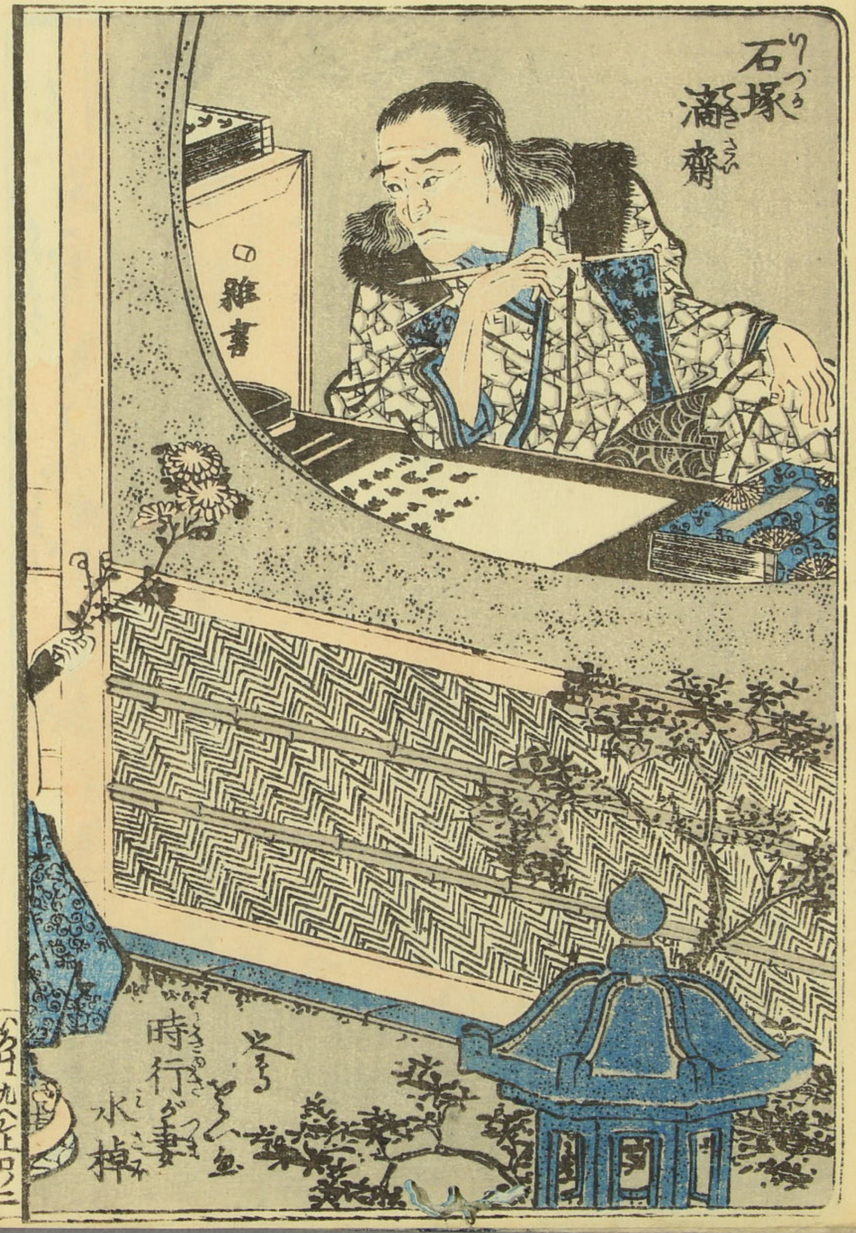
九

へ13
4307
9

いそは文庫九編叙

後世忠臣義士の亀鑑とあり。四十七士よ
りも。何ぞ忠義ならざるの。偖今の
世よ偉とあるも。一個良雄の渇がつかんと。其侠の
ほどを現ハす者なく。自除の四十六士、渇望、
良雄なくの見識少そ。良雄の前ふ
良雄の後よ良雄あらん。

へ13
4307
9
2
250
9
早稲田大学教育學部
<2000-345> 16097






滴齋ハ但馬の豊岡の住人今ハ
大星良雄の妻阿石の父なり
由良之介討入の以前妻子と
離別を滴齋良雄が心底を
察して大旦生の母堂阿房
の方へも阿石が腹ゟ
出生せし二男吉十代三男
大三郎を引受て
養ふ最
大偏の
老人と

滴齋が嫡男
同笛傳五兵衛時行

新之亟い盛谷家ゐそ馬廻りを勤めし者

ゐり主家断絶の後ハ鎌倉ふ下ゟ夜着麥ニ潜ゐて敵の容子を窺ひ居しが或夜一個の曲者ゟ美貌處女を誘ひ来しゟ新之亟と見ゟるゝと言ひつゝも件の處女ゟ忽ち地ふ投けてうゑ蒼麥荷の陰ふ辷込むるを新之亟が鐵馬く間ゐるく那曲者ハ

處女

追ゟ

来つゑ處女と矢場の引きと矢場の引き立んとする其

状悪漢さ

見へ〳〵新之亟曲者を

ゐり懲しめ

處女を救ひ

ひしゟり此

處女ふうそ

いろはにほへと上コ三

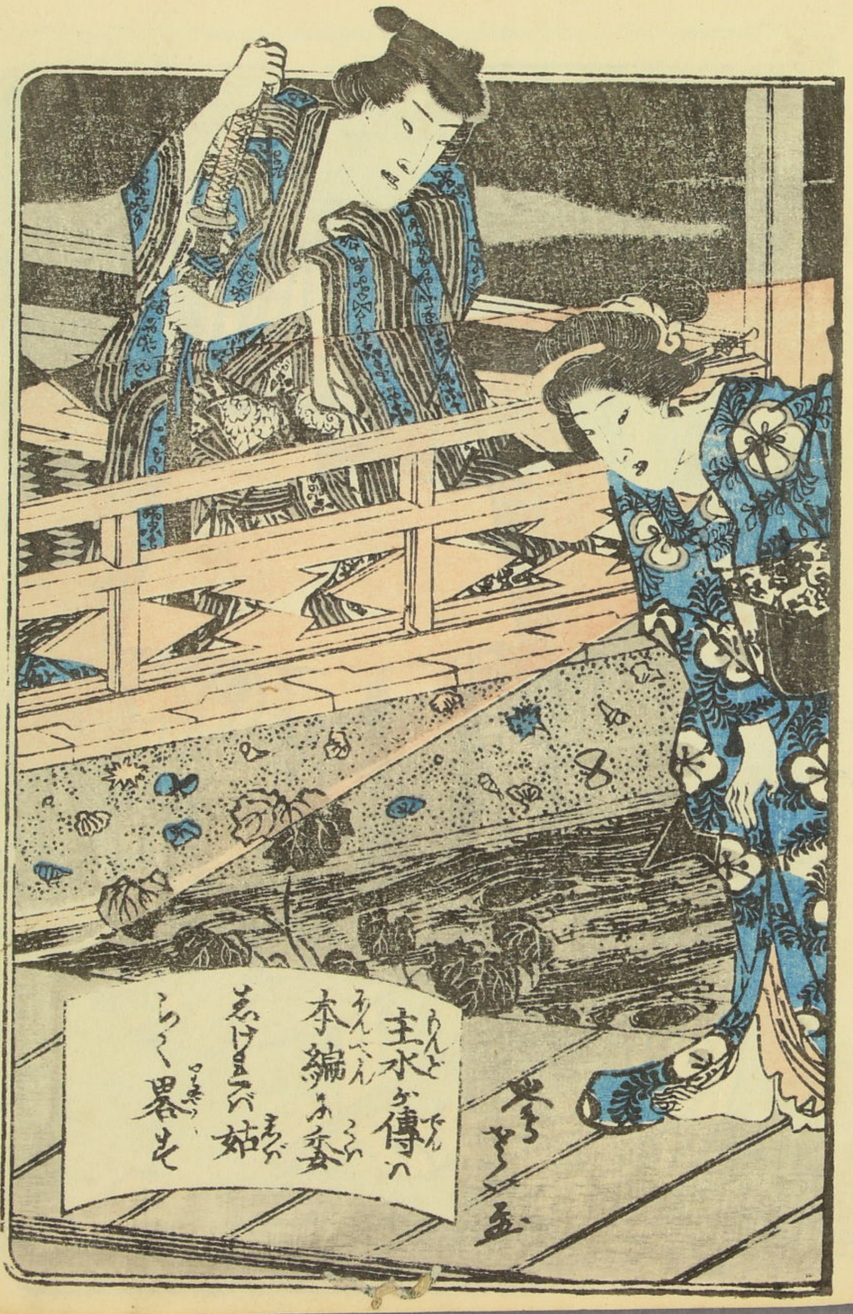
ゐこんの新之亟武高

臨砂者

ゐり敵の手がゝりを得

尚季

次編ハ説ベ


主水が傳への
李編み妾
おけるべき姑
こゝく畧也

いろは九ノ上ロノ四

江戸 爲永春水著

## 第四十九回

再説清左衛門ハ家内ヲ和睦シ後内ヲ改メて身ヲ退キ跡ヲ遠ひし後内ニ居ながら諸事の取扱ひ大躰量の大量にて怒ッた事を起さず又人を叱ッた事もなく万事克く行届ひて完全とも笑ひ切の通り名君と称せられ扨其後漫々年月を経て文化十一年甲戌の春ト云ひ女の

今一度仕れをお仕え合せ願いんとも長今仕業の開こうべ
仕用の済まで仕稽古お隔ふうともさ〜お休
ますてござりまそうその今ひらふ今一度トいふ夜門
既とうち薄更「ハテサテ費屋も支合のの迎も試合
かむさでござるそうくふ女児ふ縁談ひ
実母衣の大和迄こをの毎ごご形チトをひうけて
急とをんとすると須臾とそろう引止め「土佐息女ふ試合
縁談のをや悲ひことを仰うお祝ごぜ息女ふ試合

ふ勝つて老でもござろう「イヤ土佐殿うしと伏でもござぬ
拙者も是まで女児のお育ふ角女児ふ縁者ふ〜ず婿
程ござろれまされどもお急ふ角女児ふ縁者ふ〜ず婿
急りの年比とをさするのもふ仕の業で改めて
娘の仕ふ慨ひうべ武芸ふ修令未熟でも婿ふをんと
若ひさござる事ふ嫁するのあって今日お供とをその人
ま手ほうべふ門ま仕ふ先ふされとをひ
つも又をかるを志賀ふ例うう是れて急度借り

志「ヲヽ浅田氏義門殿仰ゲ下ル其の作家初実否のお言葉あい女児と試合ふ勝者あらば婚ゐいせあと云ひまーうまでや余ままこい試合ふ勝者ありて婚ゐされーと言ふ伏なうう乃至ふ先ゞそさ絵もうき者と縁の深ある者うい運方ゐ先に大星氏の娘をを系縁ろうけこ拙者ゞ海まぬ武士の言行い全鉄同前中かうこ口良女うまこい力ふ掛てもい方へトりをを止めて清宮馬「笹浪氏のお言葉ふ白ロ乃至ありまこも拙者ゞ不在い方ゞ拙でござる口ロイーど仰ゲ人なりとも口ロ勝ち次第をむこそろい一ぶの試合倘ゐ度白お願うべい口良女のお娘ふうう招も依ゐを可ろ元ゞ等ロ異ロ意ふ合とト分をうろうろうて教むあぞ「依もーそを許ゐ下ふのゐい人でいある支那まぞふ云ふそうらいッイ山伴でい抜ら生まい彼是の間云ふ間どーまでい速刻友是ゐ伝ゐ云ふ者なりう今一度の立合いお与ゐこと申ろう致さをまうそうゐ准備

殺さまとよト言ふ勢ひ清吉の袴とつて肩ふ綾
どり褄の裾とつまゝそこゝあべ此間ふ後門ふ女児ふ匂ひ
脹れうりんお綾い気性ふ打捨て精撃古場ふ
立出まこべ清吉の下立双方互ふ討合て
根ふ一統かゝるとき綾い例の薙刀とうと大星ふ
又小太刀とそのて息吸と合せて立あがまべ清吉ふい
前後六年必死とものて彼幼年も共ふ試合ふ勝んご
ゐと云人ぐゞまでも精神礼まそか綾もまこと大星ご

仇前ふ智りー身の綾ふ傷ふ由ふ申べ表ー
透間と窺ひつゝ森ふ
べ勝負紫ふとこゝ
一試合ふ大星ご傷や負ふ申べ所ふ
吟り人ふ面と向ごこと
とも紀へまで瞳もせべ
まふ神ふも我へども
ぱとも云まべお綾ご

と交流し遊もあるも世だ
ところの微塵の一点ふ事ら振べき遠のお綾も情様ト
衣の腕とあてう打ちて蘭刀丸流しひるむと海
うと死迫んとするおーも「ヤレ待つ大
畢民猶負けつくことひつも一間の狭き明く立
出るを人い糸放ふおのそ師と教こー沢治谷ら逃るる
ふぞうも駆きつ来たと投をて「おひげけの先
生ふい物方あって出家ふいト怪しと問べ完糸と笑ひ

その仁不審い仁乃理仔細とお物まうさべけまづく
皆へ云ト云人独ふ倶ふ端打とかろー文の如ふ振廻るあぞ「佐大里
氏皆までの魅と仁海法と殺さるんざが是ふ振る為内い
拙者ら為ふるあい実の兄支友ふとそお爰まで来展と
お綾が試合のつも兄の方ようや越ー就ては来展の
人不肯柄真の武士と思ひるまべるふつるふ那ようる
婿が歌いと兄の念永寿き仁不出縁ふ仁縁ふ永ふる方

清左衛門
三田阿綾と
試合を

あそこは旅籠あまたありて兄へやまうし候六年のそのころ
実屋の招きとうろ我御のうくいろいろふ及ばず
幸日の立振舞まで連とうえ起し名流義の要義と
お約まうせしもの序お後がいのと余広なが
云出せしおそうう見義門と示し合せん分と婿ふ
彼人がこあ長ふ仰て某由縁ふ系統と委しく
此教代家ふ利益して実屋の入来とお約しふ今日
お綾とお立合のかたの門そ泊えいて拙者ふ放
て由祝義のこまで宮ふ陰重ととろへび義門経と
縁そ支ふ就て自家が累祖よりの刀斧と合長約
ぞとおしゃあさんが他より縁談勢ひしなどうと後て
種しふ不礼の云募と出せもう由を屋と試さんる
勧こふ勘当のこと史武事ふのこと頻うそその
口元底とうるのこう今の試合のお主の門派合更い
折ひーぐまと比梅ふるつて若しうどざーる報ふ婿と
婿ととまでび年来の拙者が教を以上い強氏い称の

蘇そんや園林あつてその人孫を教へ〳〵ら下二個ゞ宗
みうち続く法あつて志賀の義い家を忘れて小論
「志がのぞ
とむとそのお孫殺さのでなんとせう拙者も実ふし
そ会ふ大果どのゞ不覚そ
ま今お務まとその時あい命をひろ拾ふてまう実
う焼しくそのこふ打ちよつ方の山も庭をまりり
この孫後ゞ悲へ朋輩どもふ系をゞ
ま肩守も廣く芸ふらくとて飲びの下此のうちふ義



の問いお綾お長き二年そのぞ備て浪侍の酒肴とお投まで
永劫家由うもうざて墨をゞつて打ち方山
の物価ふその日も暮ふ及びーゞ大果番浪お人い帳
と若て立ち通り依右日と撰こつ志賀義ゞ孫そお
綾と立派ふ粧つせ大果どの
妻も楽ふお遠のゞひとの
を〳〵一ふふ拡びるゞ介ふ綾るへ
ふべ〳〵仁の評判せーを我者と
吸まてる清兵衛つゞ裏と

その婚姻の表ふ除きそれと将へまそえんとふもあり又それ
おおそれ兵んときの兄今ふもあり一ごとも後い名ふ
あふ武術の達人又ハ仕せ書こそのしうる法家集つど
も修の経もなみ〳〵もろて料りがたそれとそのまゝおうるを
乃如て備もそひどそれ同ふ会で義と申して妃と出
その姿ふ浅めるんとそひ並一つその後ふ
阿容こそうて止そふようて法家集つい着尾
よ〳〵ふ縁と婚姻整ひ史婦の和合も最睦まじく

千代までもと契るこそべし

## 第五十回

偖て月日を経るそれどもこの
とおこのひてあるる茶会を集めるへ上ゝこそまがへ
ず下の微ひ一家中の者ハまで皆ひとへて今日ハ
ハ切腹を見い妙策き遠処の参席彼処の返薬と兵
者流行そうしが成門廣ふ伝全一行とまがこの人
（トキニ各方いお招〳〵そ出精と承り申とが必ふと違で

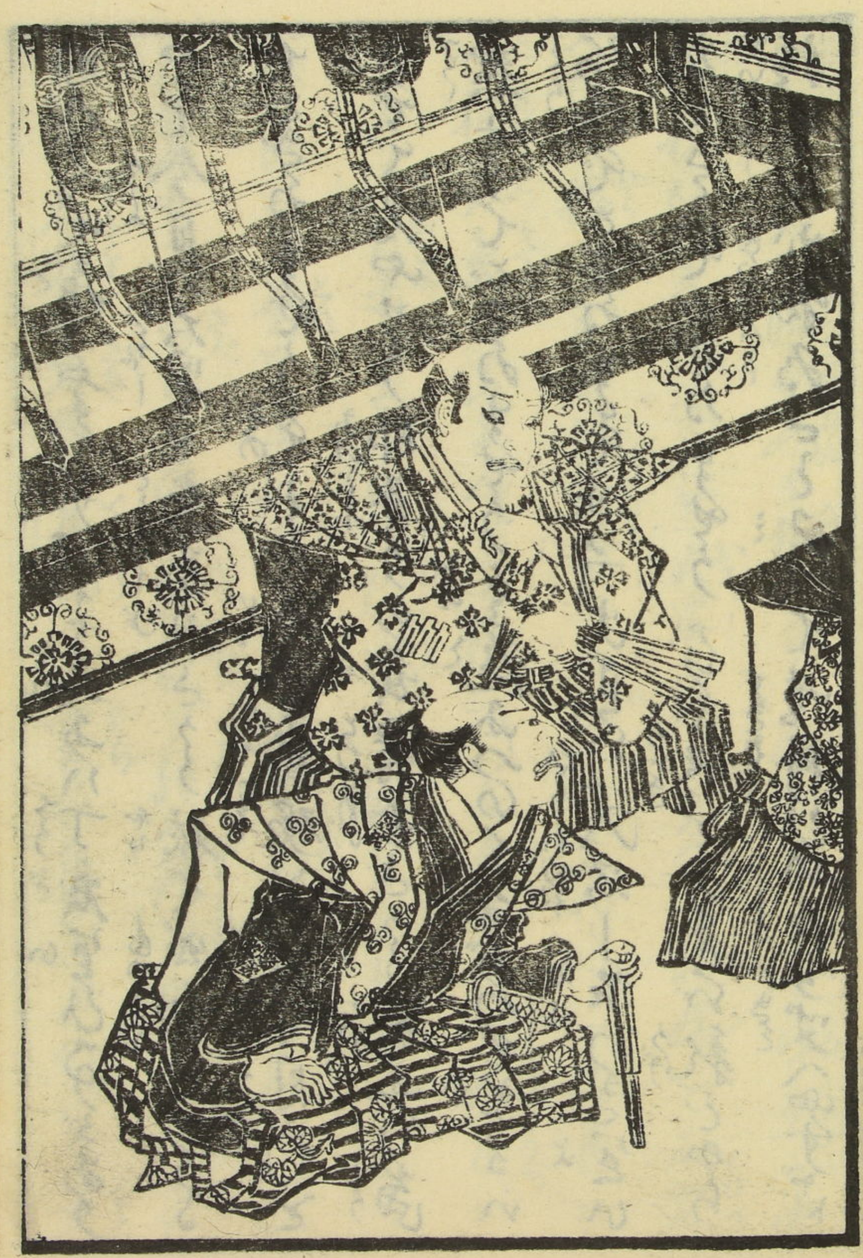
ござりませう好山氏はさう此茶の湯をお始め
なさることやまでござります。「ナニ私などのいろんの茶と云
のもまいって呉とまうまでも傍岡帳の良いのを分
ける事に成ませう×「宗旦先生のおこのみ茶碗で
気に入のあつたと云物はござりませぬか。「それが
何程でござりまして一席宅で催しやせうと云
何卒お招きふ預りとひものでござりまして茶と云
急角度々々を重ねてござりますが

お人い茶碗とえぷてお
ござりまそて。「門外の茶の味合の程もそ人やせん
殊ふ衣兵厳の箱書是い
「然うしてお心お
扨とて白ふかうる×「左程で
仮ご先日おて来てそ
仮令の茶碗で欲い
扨して余程出来ん面白い

茶碗とおいて居まして客とこ
×「おやおや両国橋で流行
歌ばかりで彼一つも覚えと
ことを茶碗と買ひおくまで
念ふものぞんじませうそこ
してこさのサ。」私をふ
金子七十金でも欲くなるい
なひのサ×「おや私又の代うな
お茶ざうう今新ふお求なさつても損
お茶が沢山あつてまだ
お釜用をなさるのう。」イエ
漬のて妻が毒をいつて彼
先生会せて呉ろやそ×「いふそんなお
ものうてやうでござりまし。イヤその妻をそひ
とが那漬を妻ひやうとよ。」
六年辛抱そして妻ひこと

濱田の女兒こゝのつちやア陸も遠江までも評判の美人
とゝのざゝあんな男と寢をするとは遠女も余程
人の方ろ子×一ナニ家人るゝ吸せるが吳くゝの就そして客の
利わく武藏やんぞとやらうまとこゝ此事第初ことの
婦人とうくやまて一の報してそりやア大遠ひの出ッ那
うくくても琴三絃いろ〳〵及びまで踊小方香菓の湯
のでも女一ぱりの髪ろるゝ見せぐ〳〵ぜんぐ〳〵
ぐらゝ此のあいでも大里あいろと女房サ金解決とゝ


経流ろる栗の湯をへの河とうゝして楽しむこと
えわく剣術やんぞふおもの河とうゝして楽しむこと
あんまり都る悪のわくろるサ子実い日外磨後の晩か
出といさぐらでもあるてやらうろとを和でお後をこと
ろるもあり中ことけどゝ那のふ女法おざうゝどんみ
ことをろやうも都をるいこと〳〵あのこゝまつ人会せて亜中
さざ仙のぞろゲまのこゝ昇晩ぞい風をかせてきうこと



鼠輩の小人
生ん大星を
噛けり手ぶ

かんうて居りやまそ、サ、イヤ更あハ丁度宜ひのうござりやす今日い大晦日ござり〳〵て出勤をさるでござりまセうそこれ今の番頭を出して用利をさセてうんやセう那をうの義者ござり〳〵是あい者窓すぐでござりまセうそなた方の報でござりまそ子メ〳〵あまい一へ公ーそつきないなぐさそでござりまセうアレ〳〵呼をさまび新とやら清そが出勤みさとうへて嫁掛ひの夜ゲヤへゆすゲヤ

まる吸なうぐへ清吉ぬつが何むろ〳〵廣間ふのろ皆更〳〵ふ
挨拶おりまそ・イヤトキニ大晦さんひろいお掃除おみも出ましやんス〳〵ま更ぐいぬふ氏かまぐ清吉まつさんの小間室ふ新吉ふおるやんなさろわくへのろ子是いまさ何報しこ鳥のご先衛門ふ新中ぐ一ところて二とやらうのい位室親ヶ結ふ独先のろ表ぐかあいぐ本方の先のおそ挨ひるまうことのござう又

格別の仕さう　子ニ清兵衛
で御座ります　さん　トのぶりあまと大星い
兵衛殿と美くみそうな
拙者のまゐしまり小ぶ
又い給うと宮派あ
お月利と教うこう物
うち裏ニ「る松ば月利い清兵衛さんあるる遠
いあり御そめく物の華大星さん一すぢ紙とつけて下
さるこういうりゆそめくうま「月利とまゐしくの及び申

のことでござりまして武家より御むところ給う
あて私ふうんうこと仕作のい物う加減のメハテそこ許も
肥まなるを作らるうのご尚内儀ともどもうこて
家中一統菜の湯が流行をる御ぐ今の世ふ
八用のの武家うぐてもる今の家芸
と求めこの内兵衛ふ逢こてお直
るそうふ御うこう宝あて来たのことも御ぶ
あうぐどぞのまゐうを処でば茶碗のお月利と私ひ

こいとやも沢サト仰おの茶碗とつきつけられ清左つの
茶まそそーが余あくうち笑ひ「是いまと
何のうとぞんじこう茶碗の目利でござまずう私とや
生まつのそ箇招なるのいと大不茶門ひ茶い物今仰用
や様と「ヘエ是でも大黒さんい茶の方へ一向仰むが
るのいとやアぞらうあんな笑くしの
心門方とお近くまさるやうな風流第一のそこ許が茶ド
なろらう茶がるの何卒仰面外でも渡仰程をと

ねがひやまセ「イエ実りそ
るござあいこと
ま迷惑のうまん「ハアそれ実ふ仰仰得のない
のうよ。イヤヤ是い茶まてこりのご箇内面さふも仰好
こ様ごまて茶の湯でんまび備ふ仰来へられことも
お茶とりくさらうとあるまい物でまの物うりよい
節ふ茶の巻やうまれごそんどなうつこそれ支こそちな
和うきたくトサ物ろいそ
川友のようこごそうお仰まを是うさいとろ方へ

お出なせへ。湯薬の呑やうでも教へてをぜう。俵薬の
湯とまるふいるゐく。わの今仮ごが失敗なのうそこ
仲のやうふに門閥でい六ケ敷うらう先生。当て此
薬碗うつ仙受と残そうろうお芝なせへ是を当
薬焼で暦をとのひやまそが是で代金七十おサ何と
肝ゥ潰まてもおどろう子そこ仲の月うつ焼どら
ゑ屏八薬碗も同根ふ見ありまるでおらうハテサテ笑
止なまる仰まも方ふ仮なせへ物うのふ此一ぶまろ



その道のお医先生も此返答が出来ぬとまへそ病と
うつで薬も宜くとお利きるが簡根な薬ふらると一ぬ日が
経くなそこ徳久利同根なれざ子。なる程ぜうでそ
日がないうつまで処で徳久利の是ハ宜く出来中と徳久
利うつまア名ゑ徳利の方ざらう。イヨく徳久利先
生アゝらく。まつてさうの。敬乗をまそ遠路のまゝ
なぐけまとめ丁寧ふまてござの一条のおき

十六味入 地黄保命酒
備後鞆保命酒屋
中村吉兵衛精製



第五十一回

江戸 爲永春水 著

文一てるい筈。イヤナニ清右衛門さんまでがあんまりお世
下一さりもるゝ何まも方がつのまゝあんなことも
作らまるやうなものゝ芸とゝのが常々お安いご
用事の中とゆまでのサ支ざらそこ絆もみをお急
まるあいだのいさる乃を幸ひて集らさ
ひ柔碗玉極ゑゆふ性ひまして〳〵まゝの端を突
ハ紋一てもお求めて来ようとなどまんが物とゆふも
る金の糸の垂でおらうとそ処とあゝ
がんでなさんお洗を終ってゆすぐ物幸事の
なさうなのでお用一ぺんの処を仕てやさるまいゝエゝコレナ
髪ハ物の数ご人ふぞり抱とゆ物をそこい唖でもおざる
まゝハア文へさ支でいのよう〳〵業の乃い物も方の作
のあり〳〵ゆ知ないとゝへまでも俄今業乃いハ不業用
でも是程までふお頼ね申をとゝ通義のものゝ糸物ゆ
と文。サアハ用利とさまるとも支が出来ないと
ゆれら真ゝ業ゑをとゝげてさるが宜いその智

つまふの以来とも自己いけ
ら
ゐ度とさっしゃるアハヽヽト言笑ひ清左衛門のときま
で
もとこまかきてゐ
す清
ゐへ「再ご辞退を致しても参会の筵ゞ
さ
ござる約束ゆゑ同列としてこひつ茶碗を引
よ
き
ゐて忽ち立つーとうちらざけ
ま
徳摩ふるつて発る
ま
も如ざりしゲ舎りのるまあ絶ていた森の一個ゲ篠すり

よ
寄せメ「コレ大里氏清左衛門つどの六枚七十あとの人沈
ちゃ
茶碗と粉々小徳摩ふお割らまこの本音の沈
き
沽こゝ出る里ゐ狂気でもめさまこゝ血迷ふたへ
大里どのト笑ひながら「イヤ拙者より
おのゝ方ゲ皆ゲ遠つてござるとハテ何の左と云
いゝ左やい足利殿の武士徒みようて弱く大平ゐい治
まるまどもまご血腥い今の世の中るゝ武術い廃
らまませゐ治ふ居て乱と忘まぞと古人の語もある

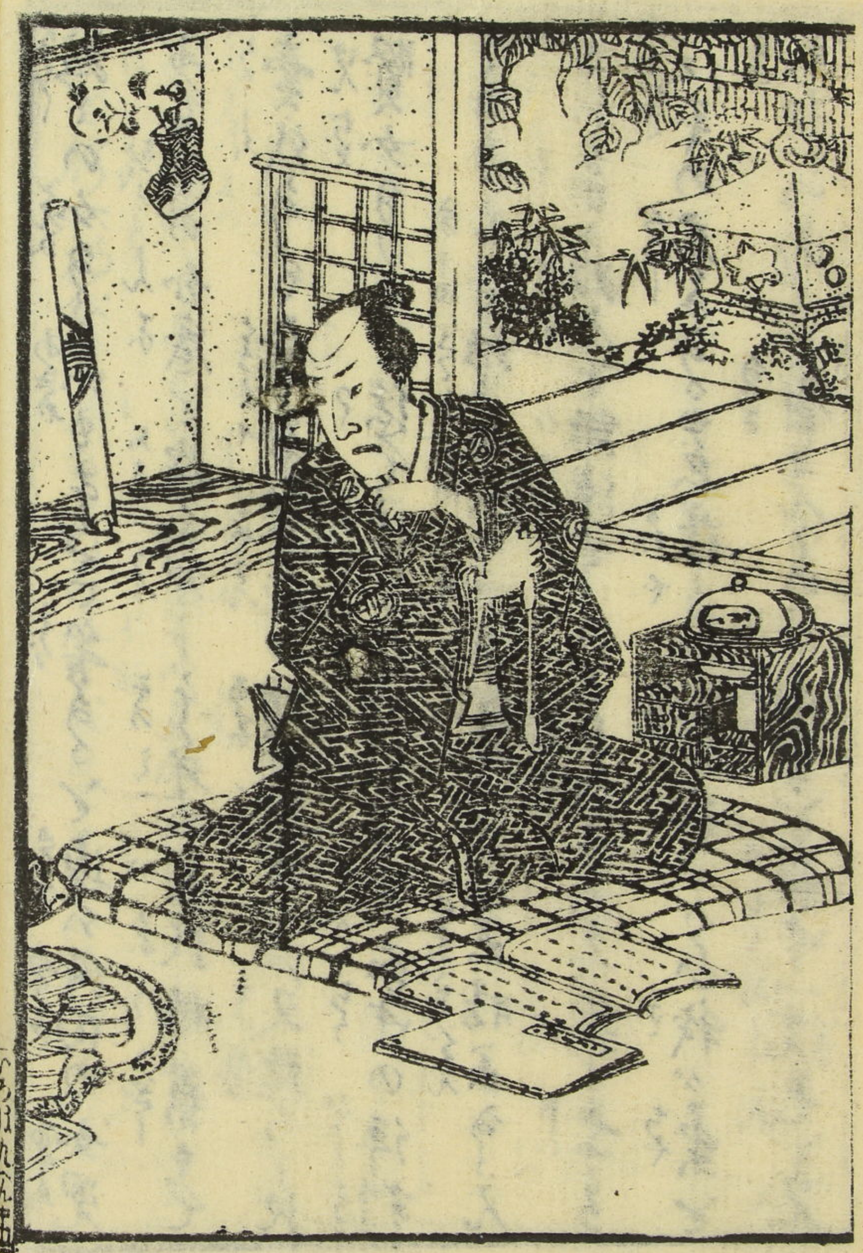
りめと倘茶一のるあつそぃ出陳とうへ的ふ栗の湯が
役ふ立ままてろ此茶碗とてもさで古くまよりや疾斎で
おまてともるもつてねふおお曲ぐろこと死いはまり称る西
盃の茶と買うんと先祖重代の瓶まで放さてとい
沙法の限り本乱るるることいるまでも栗乃い
東山殿足利義政涼くなまでのふてより世るふやろ称る
まび我さるとのへでいるけ見どまで仕事の心自分
方勝ふお力とさべさとるぐ家業の武術い余ふ

松茶が眼うろろること
くまを求める儘で武茶のひとつも買つろ栗の湯ふ
心と入まる丈武乃出精我さまてまさうのものい
用まうち心家のおろてあらうものとうるいるぐ
流行いて箇根のふまと通をるどうおてまある支
家ふ高家の武茶が作ぃ下の利摩い上の心摩を通ふんが付めとうへて

遠て目利とあろうと茶碗を割て最初の目
利を我しておき多せまうまて茶碗の価つい茶が足盃
方へ参りますまでの出先とも不拘者がおで茶碗のお活
而已利とそつ屋がへしふこひ辺ら是まで位なすい一句
も出ぞ茶面もつてとそく一個とも二個とも咸
その座とそ逃さりける形うし独ふ清茶つ八その日の
商売果るとその侭我家ふ立かへりしが七半おとり
金と行へ払べれ外ふれば余義なく素ふ往ふ

註この如く呆もまさき答まうと遁の浅田の女児
あて夫の如く底と深く感下そく対の長話箱着まで
喜代子てをを廻く茶碗の価と儲ひしの又孫らし処
賢女のりうり結てしまう一家中の評判
ふりお守袋未夜のまふ遠ゆふ出暗夜のうん
あい系が好をを娘後せーなどを抜もおるべ処と言あう
仁平の志るるの名授をとおて感下ろひ我が業と
好むいつまぐと願めんとの不乃まると郭中一統是とう

線ず香の
笑ふおく
うめ



ゐひ武乃の裏へこゑんこゑむもつゑぞ春そうーが渡
梅これ不可るこゑー政ふ古人の教戒ふ上仁とねむ
こゑいかうゑゑに上暴とねむこゑいかまこと
暴とねむこあると春こそうあいれど坐ふ茶乃
ふ心と春せーの君さる者の不乃ふあまぞ家中の者の邑
ちい我一人の邑ちふて化家の抵判ふ我さべ死と幸
ふーて清き事ふ候るきこ栗硯と打割り家中の者ふ
武乃とそげまー家ふ祖統なーうる連の右ほるり

これ是うり茶乃と止めるひ武乃ふ心とのうへべ家中の
もの者も自うゑ茶の湯とーそいかの
名ひそべ乃大星と頼春なーうるまで行
るの刀とうつきて稽古場へ立ふるしうべ更とやより
清き事つい欲ぶる限りまくそひ甲処ありとそひーが
ひと死大守も大星ふ加場とまでつけうくそうまぬ
ふいあーれとも分うその家中のその門あて猶む小なの
あーんうと更等のりとも分云云のひ源吏いそ沙法

なりしが次の年依て未屋あい孫舎系勒あるより
其ことふ清吉と仕の中ふ加くらま痴て孫舎へ
右連らま那地ふおりて加場とも中つけべくおいま
ふおい後のより清吉家ふ然をせまと
依て未屋ふも最情きお家来とおいまーろども清吉
とい一方なりぬ文の添きこ依て未家うるふ抹文判屋
恵てふ屋中ふおおおの多依て未屋ふも解こ
ざく終ふ清吉家へ送てまーとなり此次男ぶ清吉ふ



恐をせらて依て未屋の作と文
清吉家へ被差ふ折ーり判屋ありそれ上
とぶんしあるふ家作のやう
出さ候病をふて自起てまーろこ近寄をふて問せらるふ
清吉家ついにとあげやよべさ出ーと全ーふ念仕まべ
なべくふ出ふて出家のうくあてやあげて須史のふ程縁
私ひ上ることのーと判屋ふ出家ぬまべーとて
ざとをせかふあべて清吉家ついふ姑ーふ考へやうーそひ出せ

うべ再び判官の同意を乞ひ上の首尾つまびらかに
弁舌さわやかにおぐまび判官涙く感じのひ給ふの若
衆をうべ急ぎ立ち帰らんとするを引き留め実体なる
お勢伝右衛門に向ひ汝は我が実子なるぞ汝が母
まごの用意おろそかなるべき者とあつて拙者をかせまでこそ
ふようでは侍の判官の恩義を忘れぬ判官の恥辱
ありそれ気人お光をそれおまでも女房お綾の清廉潔白
皮の目利かりけり徒てまた

嫁としてよくお綾を我子のごとくいたはり出されぬが
元結家へ抱くらまでそいのよくお綾の涙せき留めて
お綾のお徒と称る岩吏が義士伝
傾ふ吾妻へりるその以前吾妻別まふ及ぶ
とも
あら梅や雪の中ふもれる花の意地　綾女
と書て送りおて吏のふ不なとそれそこいふふ接
一ものとえくう浅ふ申ら良ら物も試句とせて通の
賢女えみし同盟の義士の中おて紙ぎ出して参れ

しそぞき後お綾い祝里ある淵田が家ふを物人
ろと人い支ぶ家名と遠しう人切後なせしと支ようり白緑の
うこ繁と切捨て善提のろふ入けるぶ家間お綾ふ一子
ありその名と跡平とてもお僅ふお戈ようけるを
さき跡未お家へ名出さまと大里の家名とさらまうう
今程遠ふ清家つがみ孫い業えてありとん
編お云く尚此外ふも清家里つが別伝あること
しどお世俗の宜くある処の人支号い絶て後



ふ浅しの気ようう淺の物語い牛尾田改ふ恵
ちしとざんと牛尾田をれが実伝う改ふ恵が境名
家ふ往のふの員須と絶ふ最花やうある
一伝と知るべし

## 第五十二回

さく佛説しらとざまのぶう牛尾田改ふ恵の清名お家代の家来ふあ〜べ
いう家伝のふる友あそ此家ふ往へふるぞと船ふ改ふ恵が
ちんど父まみとしふ修勢の出松坂の城主古田伝家及の

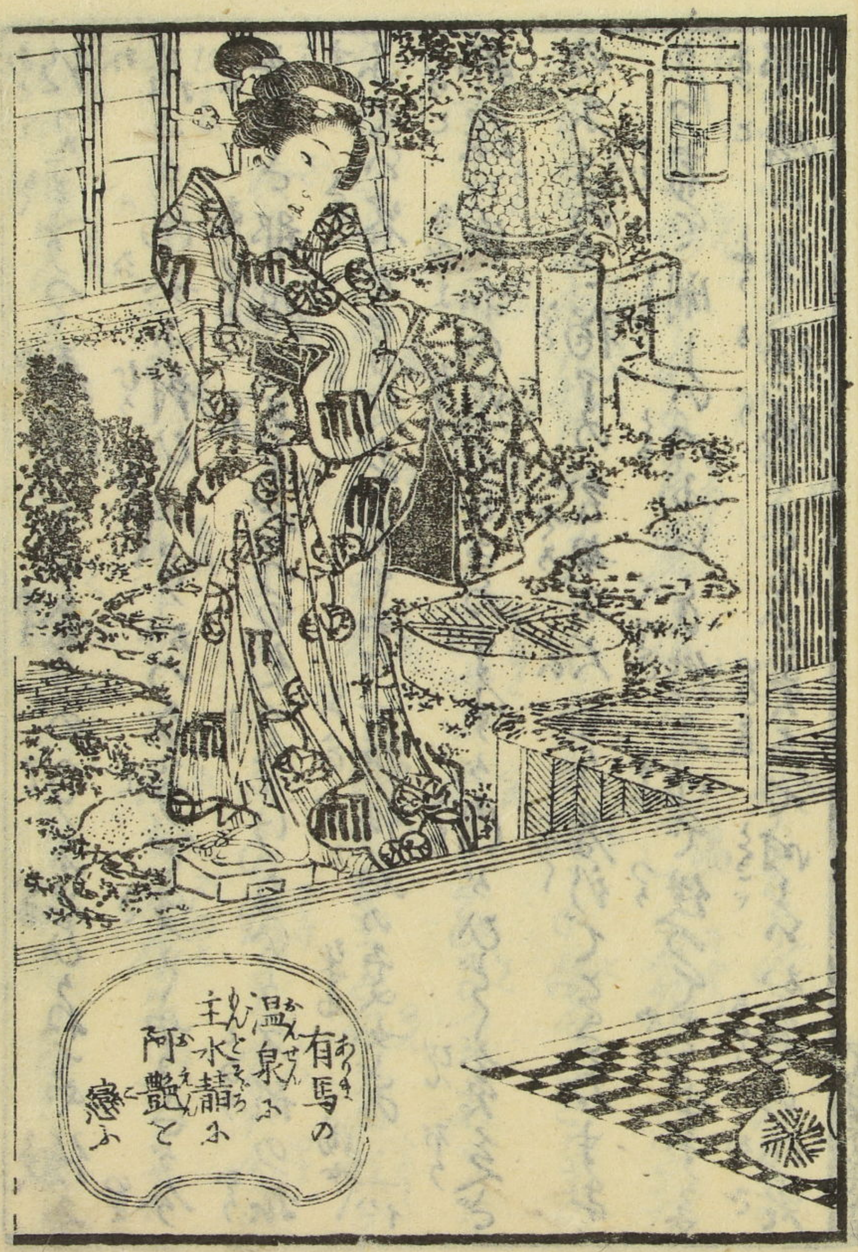
家にありて三百石と称り馬乗を初めとして今年廿二三才その容貌の美麗なる女子おしてもうつくしきまで最優姿なる心ざまの柔弱なるまで文武両道を兼ね丹精なるゆゑ別て剣道は神先二刀流の奥義と極めたる高明古田の家中あそこみふ経よおもうとそ比呼せまいとそ称ふ侯さまもちぐ〳〵出仕もせざりしが或人の勧めあい度のわき病ありて医者の薬と称んより適処より余

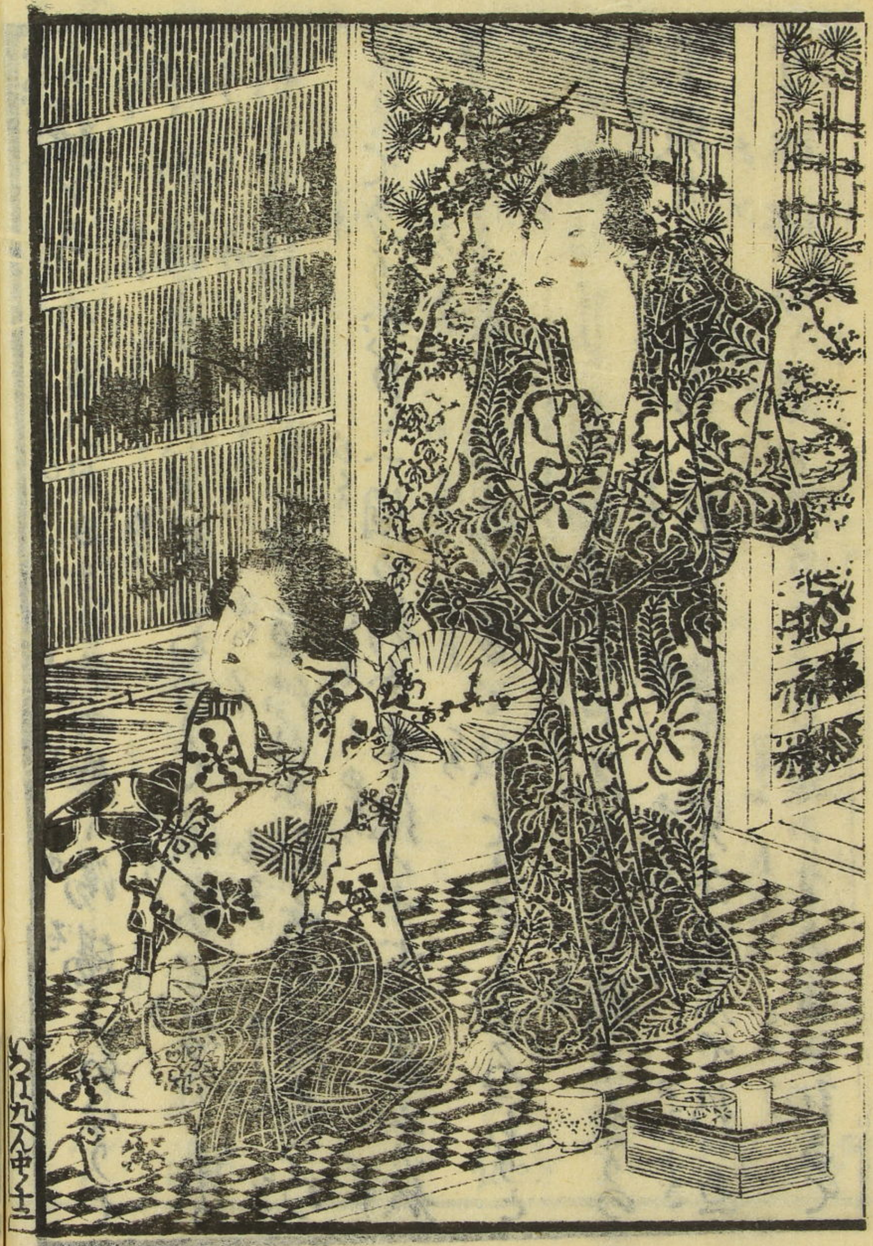
のことをくわしくいひあらねば有馬ふのうそ湯治となりそべ全快遂ひあるまでこゝに云の日一辞とそ名付もそくべく心をおくべく教書と助そ十日の暇を乞ふより君のそ線のまとどめ三百石の分の差遣はれ候えの三人とそ連そ湯治の下向ふ仰渡の出立被そ支度ひ同あくまで津の名有馬ふ到りて家名を旅屋とふる湯宿ふ旅く逗留ふ療養もくりけるが什麼とく有馬の温名ありい日本第一の名湯あそその

猿ひも大ごとをそ湯番の女をまねて長ごが湯
女と名付るゞ女が申ふ由発明ありて年長くる大
湯女と聞く年までおきをふ湯女こゝひて湯ふ入る
客の世話とをしの酒のおくれをふまで旅籠の仲
とるもるゝ郷乃客の旅籠屋る服装こゝろいふ
老ふ仁ゝり閑話の体裁て年屋国をふいろ法ゝり
ふゝまり余の日数をが這処ふて湯治も一松ふ実ふ名湯
の旅いありけん施全く虚ふ偽ふて這ふ海んと



仁様とをつもゝ日ゝまゝ例の如く湯場ふいろりて
活しの湯る躰と拭ひおつりて活衣を着んとする
折しも傍ふの方ゝり庭伺ひふ那方の座敷へ抄
んとてありかし一個の弱女年紀い十七八ふ美ふ就
ながらふ色白く眼元で男を殺をまでふねろちりと
ふて最凄しく異節ふ就てに元ゝきく就てだろの
整致るるゞ全ふと就とふ完ふ笑ふて抄ゐ
る姫郷めく姿とえるよりも遍の全ふ心動きて


有馬の
温泉ふ
主水請ふ
阿艶と
寝ふ


いろは九人中ノ十二

あとに殘つて居つた湯女が對ひ「コウおつるさんや一體何の知の者ぞの女ごの「ハイすで居ますが門がひどく更ごのふさつて指圖の出來ぬ大そう巻紙でござりまそうら者で開いのあいさつを仕て使つてきりますう子那嬢い淨瑠璃うんぞ更声でばくいお方の御座

發へ行がまそれ從義うんぞを載くそうでござりまそ

「ハテなの事ぞ由更藤しまそ

まそ實ふ出敬のあるそしてござりまそん

「ヤ支ふ就て些用そ

「サア終つ改まつて云のまてやあくい娘ござ實ふ今の

自己も生そうら報なるを外まるのふそござ

旅の恥かき捨てやら今夜は酒のあびふり
よ
嬉がまじりに出るとの小狐うたふ
まいの卒和女のそこら死ぬ拵おくれ湯「支か
自
宝うの如くお安いものぢゃまんとまるしてこの御ざ
どう
の粗り小狐う那嬢いおりくてもとんご堅義に長まで
お客がお月とお酌をまつてとれと作まして自
座敷をうり勧めまして其方い渦巻とお客
のでゞ中へ這入て困るへタヶ義理もとござまもょ「ふ



粗給う文てい出極六ケ家そうござお堅の振とメイ
まうて好りのやうご仰の卒骨折代かを多分ふ
出そうござ処と教て引ん
ト云ひまて須史うち栗ド一 丈やアまこ新うあさい
ふる迎の私ござまして好ふするまでいおござまま
せんうまア何とおくれ酒のおれとおふるそのて
上で亜件でゞ作く仙境ド
ふまそうら男にいうこひ堅されちやアすげのく君とも

いふまでもせんものサほあの那嬢が今迄処を奉るながら
貴君のお気とおつこうえて完全着つて祖らこやうとも
どうあろうとも私う貴公お心でもありいるのいろ〳〵くる申ふお礼
まそう〳〵おひの外の伏よなるもお角をうけさ文女の
そんなすもあるまいけどもお浅が
るでござ〳〵そんな〳〵私の辞ふつのて俄今ろふ浅が
いめまでもせめて頭のおそびもさせそうよ泥
おうようなそうくそのふなさのまゝそのいい私が



宅ひやうふ仕度をお
嬢とぼんで出給ろとお
支と笑やりが今日亜ふと
他ふ仏がとお座をへ
ぜござまそうら那嬢ふ
よめア第事教むろら納も
酒肴の准備とも宅ひやう
供の表の再へ這へていろ〳〵

ゆうふまうそうとうて黄ひこひのぐ湯
そやアおくさ
まひあいおよびません表ひきこのおざしきおこ二階お
とうとうをしとてござりまする
るいやうふ我さまてまんまそらそそこ処へ物ふも知れ
てまりませうトちひつ湯ふいあつさ仕ふそうまいへ
精ふ仁痛しくそこ対のざしきて逃さの家内と
まふど話仕ふ姉らくおうて伴のまんの湯番と掛へつとまあの
ざしき座ふのり来り首尾よく姉とのひこらく伴ひまりし



よくと板ものまび姉ふ縛のて一間ふまり辞ぞくみふ
板折ふ最うのくおくえへくろがひ又女の名とふ彫とて
正の手い甘方のうへと二のろ二のろ起さるれどもまた教
源きまきおろふその振袋の来を見られば誰が門ふ
こんでも十七八とおぼゆる者のく最ふらうとうんーふ
さへ仁の動くだりおると今まで例へ引つけて祝しく
こまこんの田家を受葉さも十倍おて年ふ仏会ど
お関いと評判うのーまあれどもまいお菜の仕

江戸 爲永春水著

## 第五十三回

あと二個が意向の須更辞も途切まつゑれが老爺の猪口をかるゝ小鉢けるゝ小鉢けるゝ小鉢け

まづ又ばくくして「そこて年ハ何の案ざエ「ハイ十八で
ござりまして「ある孤け身で伝でおらうとおつこと
更い私うと云う一ツ呑つ〳〵飲で呉り申と「ハイトいふ
ひやう〳〵ふとおつう掘りあもれバ「アレ
モウ〳〵越すとお救ていなさいませんヨ「イヤ〳〵没て就
まふ致そのでいなの大造実ぶ何と今宵ハ這処へ
泊つて呉まるへいかまいのトをくともお断いう
俯向くのミ泪云ひまて「是いおう何の拠

殺しさりのさそ拠ふ死れて居ってい状がこうゑ武
士ある者が私と持てはのよくくなる
ざと推量して何の辛ひ処ハ
就とあげ「私の申るこらいの者を出汚のとの出越
云ふもゐろ今の申ふを仰てかさいまものい寛ふ
焼しうとござりまをけまとも何の拠もはのでうい猛攻
ふのりゐまをうふ免るすってかさいまし「フウ丈ゞや
何の処そふ涼くと云かいしと風
とこそ男でもあつて化の男ふい狐が

絆されないとでもそんなに
るの夢さ〳〵ありんせんヨ」「それ
細いありそうもないねざ
とでもふのう」「アレモウそんな
りのう」「何れもさつぱり
お出来ないのざうまひるそ
る私どうなるざと思
のコレサ何も私ういるのい。さア〳〵分解ふうって



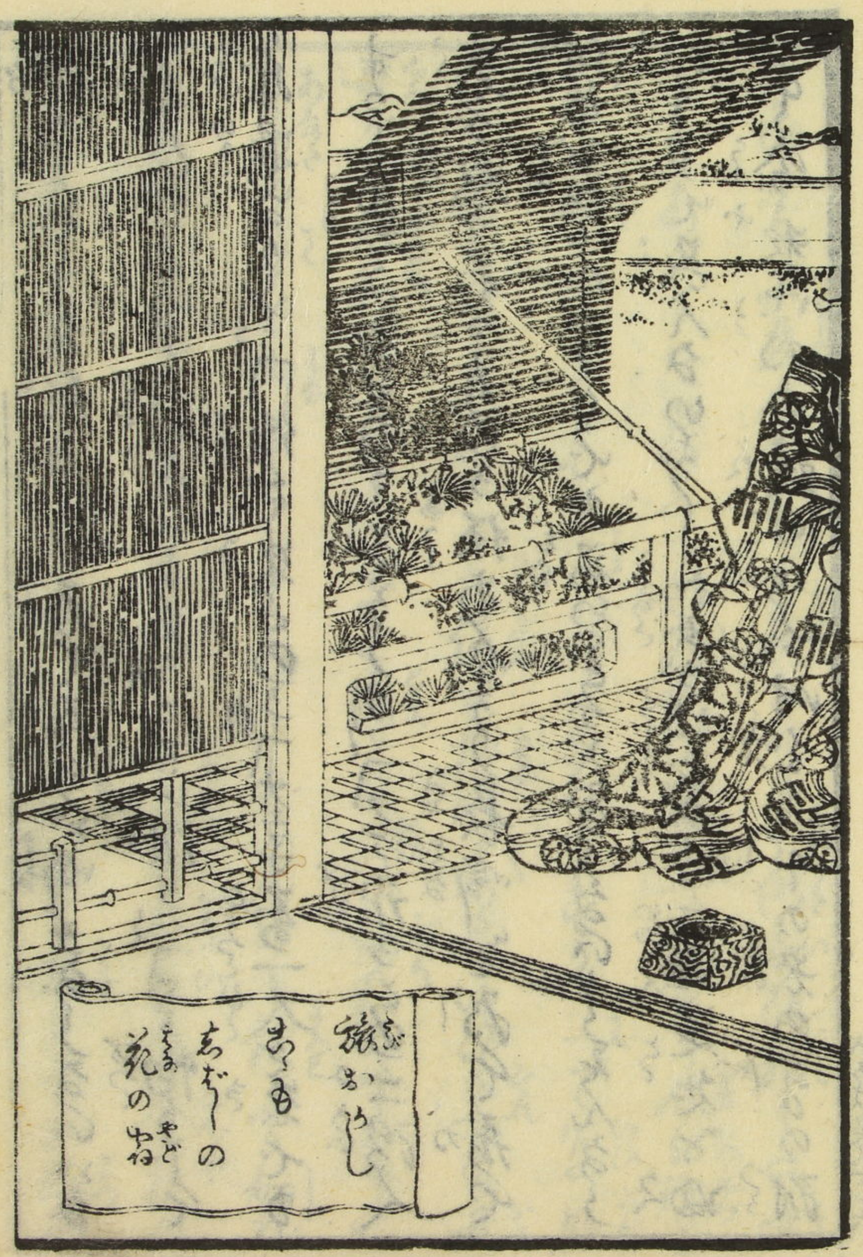
ツせる」「エヽそんなうまりしまんが子お抜とおそ
ちやア厭でござりますヨ」「ナサそれまでの抜
るんぞとそうゆうみせ身でもないチ」「アラ恥
私も恥ういるまんが先刻おさんふちら
とお目みをつさと及びのうういふひるざう
あんなお方ふ一生連添つう女ふ甲斐がなて
必疎〳〵らうとそうて居りまんあんそんな優しい
るまでそ仰て下さるのでござりまたうと心の先立

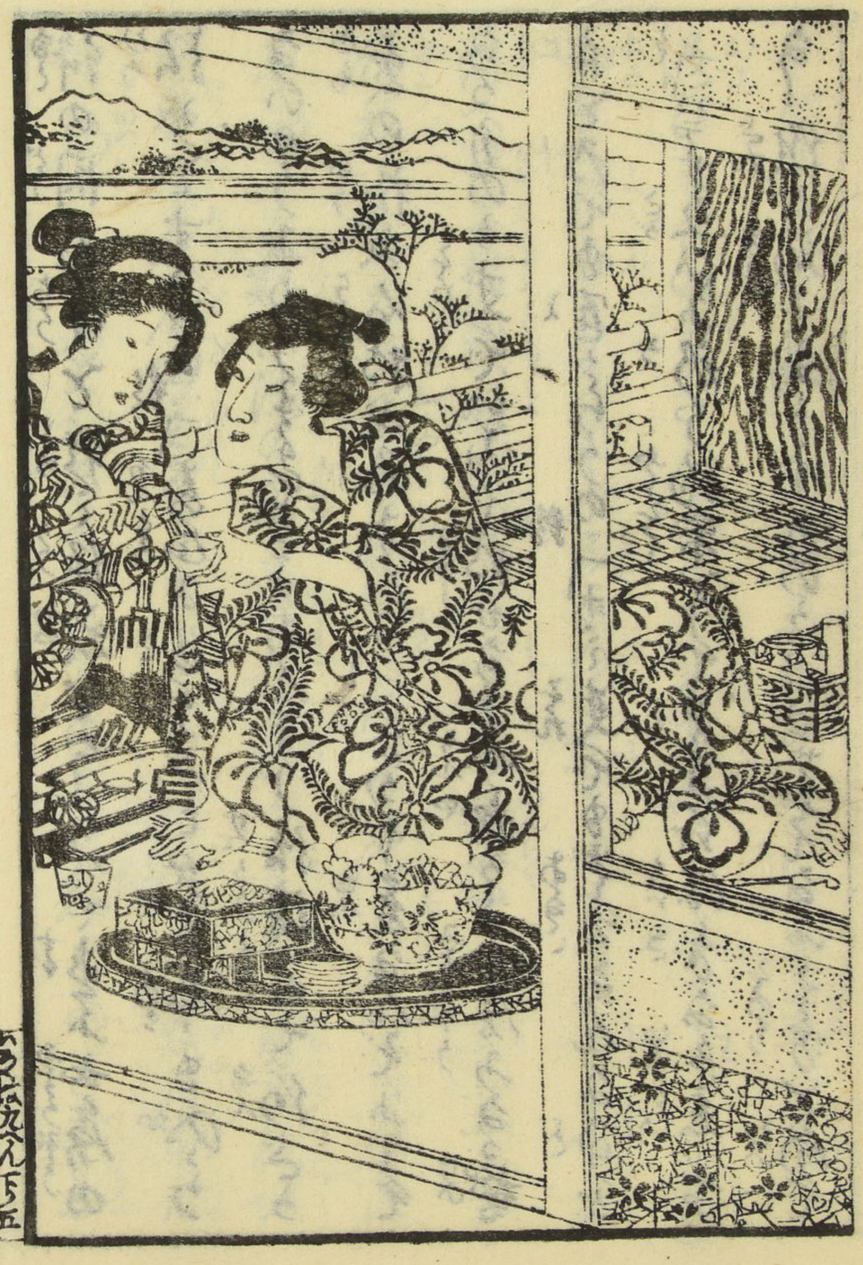
やうでござりまんのとお案じ辛抱して居ますのも何をお隠しまうしませうが私おいとう一個の母ござりまして御幸来被成母と共みてゐる
やうな男がありますやう狐子の牙を往せその実も妾
仰ゐでい来が覚束ないう般令まい貧窮でも
如之のよい人を思の女房みて居る人でござりますば
安心するやうなよい性ませんう狐幸福う
いふ人ととうれて居りますその智をおいれの



牙もつてんで深なみ
おろして居りますそうふ
るすつてやさいまつトいう
さる和女のお照いとそ
湯女の吟で文程まてこいふん
ざ牙覚ふんあげこん
る宅でも生涯え程
ようう〳〵支ふ一つも狐ういふふうまた

とぞんなふう娘ーうぞござりまするけまどもまづいま迎ひ
及びまないますさとあきこゝあて帰りますヨ「イヤ和
女さへおかゝさまぞまつと妻としてまういりまあ
縁へ母ぢ根便なび母とも安楽よをるさせそうぞ
何様ぞやつまり承知「アゝそりやアまあでござりまし
う〳〵「ヤ鬢ひ添い老ざ対も約うえへても約束相成
の都来半座田をあとまうして三百石と取越して若
旦那ぢまぞ「なり〳〵美なんぞふして
弘めとするわる数「まづいまふりまするまでござりまするあんまり結構ゆえ何ぞう
美の粗末ながるまでョ「なり〳〵美なんぞふして
あるもののう支でいよ〳〵お房ふるる勢
去をみて宜うらうの数「ハテサ互ひ初う約束そしてまびぼそんなふうぞ
す縁ぎ約とまうすものう。コレサそんなふうを向て


ふぶきおやし
ちぎりの
花のやね


ちうじやうさんしち五

私うそうな新ぞうりを吟ずるのいる
トそひつこぐつこう引ぎやせらま「ァレ誰ろ「エッ怕うて
あびのさで退ぐぐ「須ぞ来とのう「ナニ子ぎ一人ぎ来でも
するとおうございまして
来る奴ぎあるりのう係あんまり長吟をみて居て
彼の老かおうくでもそんなうそんなう
彼うして兵んなのよう一遍逃処と泊
て今歌にの鏡のぱる時ふかの老のその附

一のなの申りふ忘んで来て居なのうそひおーこ吟
しまあるうらのつこうるを泊めるこう「そんな今公作こ
ぐいのうらうそうこうぞあるまそう「ア宝泥
母ぎ不承知でも言ぐ申りぐこ「物私いてまして
あるこ芸子のりを吟ますとろくそどんなふ新ぶろ知れ
ませんョ「彼う安子の老ぎ今歌の
とるを歌しあやの申りぎ
```
```

お待ち遠ほどもございませんヨと「約束の通りに待つて居るぜ」「おゝ有難う」と渡る服と共に飛び込んで待つて居るぜ」「おゝ有難う」と渡るわざと辞儀をして出て行くと入れ違いに来客の二階へ通るものと思いの外二階へ来ずに奥の間へ通るのを見て「ハテ変だな」と思いながら一間の内に入ると間もなく女中が来て「旦那様がお呼びでございます」と云うから「ハイ」と答えて二階へ上がると旦那様が「ヤア来たか

七脚程前の張平みたい
そうして休むやうに
まて六内の鉄びと酒べ
さる者と酒て二階の
七脚張平と此策か
うら呑ど〳〵
もの
と云てとんなるものと
合点が行うれへ
馬まて屋て来こ一足の
云つて云て呑ゆる時
つまるものの是は
めとそや酒ヨ
つと イヤ夫ほまで
れへ 扨といふ
そうそのて
とふと云
呑とするを

なりそうもない様子が件の紙と比較ふやがて
六間由公やあの碌機嫌ふのしる方「ムラさて
次ぐるじゃアねへ俺実根ふーろ七助ふーろもと知
つて中ぐらい極内で叫んでやせるが実いた刻俺のさ
るふ二階へ揚つて十七八の娘が来て居て
どれとさ一向きのこそ〳〵叫ナ俺でもこのつい怪ーいと
思つてどうも之女とそて居ることなるせへと疑い日比ろう
武法とるをつう云郷やる娘をつろひの外とんざ

濡るる時でとふ〳〵その娘と云説落して今私のの
種のいろ〳〵ふ思んで来ることのごうこてへられ
ぬくどやアねへろ「須「ハテなそうやアのつまらぬ事
しごうそーてそ娘い男ねそう湯女でもあるのろノウ
六「ナニ素人の男で宅ふ私者ふざこそふ処が上私の
き宅ふへて逃へ逃て頂ふて奥根ふるさろとつふ経ぶヨト
思ふ第二階で濡女ーその菊枝とさやれ示ー「初う
云ふ私ごうそ処でけ才笠ふ汤とねそこの由酔ハ

せて速く森ろそうとの人等阿不遠くれへノヨ「コウもし
旦那さんそりやア実心のあるく「実心の俗のと況主の身が
左様そうして有のて居るのざが考根もまことむごい物りの
為やうとやアねくら七「物りあれへぞ俗の根するのうこりやア
大変ふるのて来さ「コレサ俗の根しさ根ざそんなふ気を
まで変て騒ぐなよれへすりく七助吸ふ至てそうう
一番呑らー「ハオア酒い呑ござョ「支ざうてお角且
那の下さと酒ざらうぢやアれへら七「ふその下そのさと



のざうう狂者ざ六「ハ今なふ俗のぶ気不陸のてそんなさと
ハもの心のざらうる茶い役を上戸の若いれへぶ。ハアせくさ
今歌よ狂がそ、狂て痛るとうふ叫「とオしさのので
俗根ぶろう。よせくむざなるのざ支ざうおめ母をれへさ
湯女でもほて来むが宜ひやア。ヨコレサ。俗の根しさのざト
云へども七助い返るのもせぞ腹と組で考へ居るあぞ
「アハハしとのつい大笑ひざ狂と云奴い云せておめて
さうく後年おめと二個ざやらうそう「ハしする狂七

その後とそのだつうい一家会長が残られへそなるを
とそいおくて機嫌と迎へて、春われへう。是いまくう
余程後後ぶきつことつくへて死に近で仕舞ふ六升廿
えなる森林や斗ふ揉かるいわへうそらうへト是
う二個さへ向ふさの呑そこ果いその
ざ屋ふ碑側まて茶後も知らで森へけり

第五十四回

結てその報も小松史て祖父くはるの残れいど



二階ふ出獨子今ふもおぶ髪が巻びまうと外房の
程ふおりみぶう森もやくそしてふそふ下も
奴のヒ卿ぶ主人と当ふ出義出最茶著書六門が
唖への報ふふうち残きて逃さる二階ふ起きてまふ
孫云のそんうと当ひへうどもイヤくヨ比うらへて
為隠い出飛ぶ更そ比ぶいようくるるでおん
と生茶雲ふ身とりつて実兄云へて倫ひようと用
ひらまでび給ふいる支う今青その報ぶ巻で

まうと途中ふ於ても旦那ふ逢せぬやうふ
為ふと云いさまざまその場うう逃び給ふ
ひとり只事と定めつゝ那六門と孫革が辨慶まつを
事ひ木霊ふ移屋と思ひ出すのあふて
浪綿の一刀抜もさつて二階指ふの事ふ
とうも掛つ今や遅しと移とも
毫知らぜ思ひ寄ぬ二階の掛行燈の
つまふそまび指ふの七助が酒そうう逃
げ二階から下ふ飛の行ぜ
揚つまふかる一件和女ア何の処の者ぞとねめつけらまてに
籠つまうが旦那ハイ私やア山こと申ふて
お我ひまうしこの通ふ者ぜござりまん
且那ふお用ふまつてる我ひざ我ひがあるふうこまい
まうぜ生若い女の癖ふ何を抜ふ移中且那の
方と白服で払へ払ふ移ふお影いぞうぜござうどうて
我ふうわうるみさふと七助ふて眼ふ角そて
び二階から下ふ飛の行ぜ
揚つまふかる一件和女ア何の処の者ぞとねめつけらまてに
籠つまうが旦那ハイ私やア山こと申ふて
お我ひまうしこの通ふ者ぜござりまん
且那ふお用ふまつてる我ひざ我ひがあるふうこまい
まうぜ生若い女の癖ふ何を抜ふ移中且那の

お独りでお在なさる処へ使が一本頼さる用が
あるゆゑ教ゞ叫てくれ悪るがるひ教ヤイ工今教でも
けまびるゆゑのでおゐまして〳〵ひるいと教でも
教ゞ叫で入つゐる狄でもありうの辛そんなるとも狄るのゞ
「イヤ〳〵そりやアそらひ身が已れ於い物堅いから教で
教ゞふ女ふお逃ひるのさァお振ひとそのう人敵うふお睡眠なさうら今教のるあア
迚も仕切人夫とも大気の教ひるゞ山奴が気次七



お月の光さふふまゝしあげてきうべの「エサお前
さんふ気次で黄のて渡むゆうるゆゑ月外の人ふ
き気薬そして悪んで来やアるまんばふそんるふ気地の
悪いゆゑと云いるのでそれを「エサお前をまてお呉なさいョ
ご気地の悪いるとふ。コレ宜く笑けョサ已が今
教来ゝ伏も敵うゝ夫を教つて居るが女のるゞと
名のふう腕丈を蒐いるゆゑ〳〵私らふ云やつけ
あごてそれを安も笠ゝ十七八ふ化て来てる

七助が赤心
阿艶と拒む

火の用心

あり
屋お元のわく古悪婆め人好くも和楽いお足おて

こぶくそうとみやこぶ
ら
等のこのお事るわの「ヨヤ皆ふおそぶこ工私きやア

おお姫の素人ごョ文とおれこれ郷て支婦

やそく
約束まであてつこまびお今ふもおお人仕つこ日あやア何の

ところ処お名が付て和楽るそうぶ私の事屋きき

のおまで走きみやアなくるのお茶ぶらうあんまろれざこと

おくおそひでるい。ーザそのもやア何の根やう角ぶそて

お互ひお答くのいハ子夫ようおお和そんあが私ぶ笑

藻い湯女さんとか世話そて進るう私ともお元の

お例へうまるやうふーてお長るる工。モシそんなふ仮

細とうて教んでも解らるのの久何の幸お和むうら

ヨウ奴さん七ー三畳しいー何ぶお元と支婦約束

そてお人仕くと。ヘンお挟が茶と湯さアそやア

お元お仙酒のう人よやアそんな仙銭もお仰こう和

らわ人が文とそふおうけ文るといかのが全体る枝ぶア

仰さ

今日彼の仏とともに奴さんが参りて人と
いふつらつらみるわへいふべうもあらず
の答を掛り合ひて先かうべき筋ひふる駄い遠ふ
女の名にかゝらいふよりの那ら捜ふ忘姉といい
ぶん儘ばうへふ云募ても家門の者ふ入こべ笠
うゝめ伏ものうちへ全方ゝも七助ふそひ込ふ
らまてもこゝへおてそ其ふ云けるふ且ま
さん先ふそのへ又ふ駄ぶ者行いそやと外房ふありて

綺麗ふ俄ふ何ふ何やら存ずる人の争ふ捜ふる雲
何のやうんと誘ひて捜るのにまで来けべ那
七助とお駄とぶ間着暑中ふりしべ流石ふ家来の
ても弟と称てその場へ新も出うぶ余ふても七助ぶ
ふ何のまべ那やうふ人も教まめさゝ出ふ為我物とべ
俄やうんと心中窮ふ恐ふと会こ何とうせんと思ふ
の門ふもお駄いますゝゝゆふしふ捜ふのふいふゝうもふい憤の
絢ふ余まべ堪うねて七助と一ふふびつけ「ヤイ七助

そち
そち方い遠処を何処ぞと尋中とのひ殊ふかまこと何の
う女とおもひて妻今の振舞旅人の入込むもの
湯浴場で偏遠ひで
いつそ処ふもも分ぞうて法外な釈こと振る者ぞ来
ふ亭主ぬ湯よりして眺を考ろきり〳〵を処とを
意の邪ゞせ〳〵疫をまぐ目汰ふ仰合ぬ一云と尋へバ
遠方いとゞ狂落る淡どり拭ひ一寸笑ふ魔が跡へ
ろお情なのそのお云伝遠処と何ぞこと郷こまが

何ぞこと尋めそつい彼初の旅の気毒性も知
見ぬ女とそこへ人おん越ひ連ぬ内ゞ偏支考ろ遠ひ生ど門外の
とお乳しるくかへ連ぬ内ゞ偏支考ろ遠ひ生ど門外の
とおそろや何ぞ偏支考ろ遠ひ生ど門外の
鼻ふひろ気ふ人の入込む格子の湯ふ音田の部来
牛尾田をあぶ如ふ瀬まて強ふの強動ありしと気汰
あゝいと気ぬろう厭さるのお人名の汚まこというふさい
よもお気狩いをさる処とぞのて下部奴がい五

後そば覚悟して如ず来ると途中お約束そといふだと追ひ詰しさい考への有を大切と必ひ込でる友の主支と知ようとも思ひ留めさぬと余りさの人べお情のトお心のまゝ受うち明て主人と添むの志助ぶけものぐうりのまゝ売れと丁教ゑお限定あまこべ其ほい編と智恵と改ゑあ第十編ふ要〳〵流くべし